

## 「和」の来た道

裴 崢

中日国交正常化された翌年の1973年、私は大学に入学し、家族の反対にもかかわらず、日本語を専攻した。卒業後は中国国内での外事弁公室（外務省所属の地域専門機関）や大学への就職から、大学院進学、日本への留学、そして今の職場に至るまで、中日交流及び日本語と中国語教育に関わってきた。私にとって、両国の関係は常に意識されることで、また現在中国語を教えていることは、私自身の中国文化への理解と認識を深めることを意味している。

2010年9月7日、中国の漁船と日本の巡視船との衝突事件が起きた。その翌年の2011年には、小樽商科大学における中国語の第二外国語履修希望者は、前年とほぼ同じ232人で、同年新入生の半分以上もいた。しかし、衝突事件後も両国の関係が困難な状況を引きずったためか、2012年の希望者は183人となり、明らかに減少した。この年、奇しくも中日国交正常化40周年を迎えたが、領土問題をめぐる相互関係は40年来未曾有の緊張状態に陥った。そして本年度、2013年は、中国語履修希望者数がさらに激減し、144人にまで下がった。他大学では、前年度より4割ほど減り、履修希望者減のため、所定クラスが半減された大学もあるという。

中国人開設のウェブサイトである日本新聞網の報道によると、今年4月19日に中国の程永華駐日大使が日本記者クラブで中日関係について講演をした後、記帳簿に「和平发展，合作共赢（平和的發展，協力して共にウィンウィン）」と書き寄せた。2時間後同会場の記者会見に出席した安倍晋三首相は、その記帳簿に「以和為貴（和を以って尊しと為す）」<sup>1)</sup>と“対応”した。時空を越えた唱「和」であったといえよう。

<sup>1)</sup> <http://www.ribenxinwen.com/html/c/201304/19-16402.html>

『論語』に出自するこの「和」は、中国文化の核心だと、歴史の授業で教わった記憶がある。56の民族がともに中国に暮らしており、また中華民国(1912年)成立初期の「赤、黄、藍、白、黒」という5色国旗は、「漢、満、蒙、回、蔵」という5つの主要民族を代表する色で、「共和」という理念を象徴している、と教師が解釈していた。新中国成立後の人民元紙幣を見れば、当初は漢文、蒙古(モンゴル)文、維吾爾(ウイグル)文、蔵(チベット)文が印刷され、60年代には壮(チワン)文と漢文の発音記号(ピンイン)、80年代にはさらに点字が加えられ、合計7種の文字が「共和」されている。この設計は今世紀に続いている。

去る3月に開かれた中国第12回全国人民代表大会で、国家主席、副主席と全人代委員長、副委員長選出の投票には、各民族文字の票も用意された。万里の長城に近い大会開催地の北京は、千年の間に、遼、金、元、明、清という5つの王朝の首都、また準首都だった。5つの王朝は4つの少数民族によって統治され、漢族、いわゆる中原(中国文明発祥地の黄河流域、揚子江流域を指す)民族から見れば、歴史上他民族に7回侵入されている。しかし、7回の危機は中原にとって7回の転機にもなり、他の民族と妥協、融合を重ねてきた歴史が残った。妥協と融合によって、一つに集約し、やがて次第に腐敗、衰退、分裂を重ね、その度に、多くの民族が交流、結合し、多様で包容的な国柄が育ったといえよう。

元来、他民族に侵入されると、勝つか負けるかして、負けた場合には、その文化も民族も滅ぼされてしまうことが多い。しかしこの流れから見れば、勝つことができず、他民族に征服され、他民族の王朝が成立しても、そこに生きる民族と文化は生き延びることが多い。国旗や紙幣などの設計は偶然ではなく、突飛な願望でもない。56もいる民族が長い営みの中で共に「和」の精神を大事にし、「和」の道を貫いてきた自然な成り行きではないだろうか。

## 1 「中国黒龍江北方民族と中原文化の関係」—— 劉邦厚

1996年10月、北海道・黒龍江省友好提携10周年記念事業として、黒龍江省文物展代表団が札幌に招待された。その際、黒龍江省文化庁の劉邦厚常務副庁長が「中国黒龍江北方民族と中原文化の関係」と題して講演し、私は通訳を担当した。講演の内容が未だに興味深く心に焼き付いている。

古代の中国北方民族は遊牧・狩猟と漁労に携わり、定住しなかった。狩猟民族は渡り鳥と同じように、季節によって、温暖な地を求め、組織的に大規模な移動を繰り返した。

しかし、こうした黒龍江古代民族は、黒龍江地域内を流動するだけではなく、漢族を代表とする中原文化とも絶えず衝突を繰り返した。北方民族は強靱な性格と得意な騎射の力を用いて、農業経済を主体とした穏やかな中原文化を激しく攻撃した。

北方民族の強大な侵入に加え、漢族の地域にも複雑な政治や経済、階層などの矛盾があり、幾つもの中原王朝が滅びた。これに代わって北方民族が幾つかの王朝をつくった。契丹族の遼朝（907～1125）、女真族の金朝（1115～1234）、蒙古族の元朝（1271～1368）、満族の清朝（1644～1911）がそれらである。

中国の歴史の大部分は、北方民族の中原への絶えざる侵入と、中原の漢族を主体とした人たちの抵抗だった。

北方民族は中原の文化を攻撃することはできても、自分たちの文化を中原地域のものに取って代えることはできなかった。北方民族は攻撃が一旦落ちてしまえば、中原文化に溶け込んでいったのである。一時的に頭角を現した北方民族——鮮卑、契丹、女真、勃海などの民族は、大きな衝突の後に漢族の中に吸収されていった。

モンゴル族の支配者は中原の人たちが昔から耕してきた畑を牧場に変えようとした。それは、元が百年足らずで滅びてしまった大きな原因の

一つとなった。

満族は北京に入っても、漢族が統治していた明の政治制度をそのまま継承し、200年ほど支配することができた。満族の支配者は自分たちが漢族の文化に呑み込まれることが避けられないと自覚しながらも、自分たちの文化の発祥地に漢の文化が入り込むことだけは防ごうとして、「柳条溝」<sup>2)</sup>という境界線を設けた。彼ら自身の多くはすでに満族の言葉を使えなくなっていたが、黒龍江周辺に残っていた満族が自分たちの言葉を失ったり、昔からの習俗を捨てたりしないように努めた。

中原文化は北方民族の上層社会を通じて、黒龍江の北方の各民族に広がった。北方民族の支配者には、幼い時から儒教に親しみ、漢の文化に馴染んで、中原の王朝制度も熟知している者が少なくなかった。強大になった北方民族のどれもが、漢族の優れた統治経験から多くを学び取った。

清になってすぐ、厳しい思想統治のもと、「文字獄」<sup>3)</sup>運動が行われ、そのため、多くの漢族の文化人が黒龍江周辺に流された。そうした宦官や文化人は6万人にのぼったという。

これらの人たちは流されたところで、漢学を広め、地方誌を著し、詩のグループを作り、子どもの教育に努めた。中原文化を北方民族に吸収させる上で、彼らは先駆けの役目を果たした。しかし、彼らは奴隸的な身分だったので、文化を伝えることに、さほど積極的ではなかった。

清の後期、中原地域では社会矛盾が際立ち、農民の反乱が頻発した。清の統治は次第に衰え、自然災害にも襲われ、農民は飢餓と貧困に苛まれた。彼らは苛政と災害を逃れて、未開の地へ移動した。齊、魯の山東

<sup>2)</sup> 遼寧と内モンゴルで作った「壕溝」を指す。壕の周りに柳が植えられていたため、「柳条辺」、「柳城」などとも言われている。

<sup>3)</sup> 支配者が文化人（主に漢族）に対する迫害。作者の詩文から字句を取り上げて罪を問う。重罪を言い渡され、左遷、投獄、殺害などされ、家族や親せき、友人まで巻き添えになる。この種の迫害は歴代もあり、清はもっとも多かったという。

人、燕、趙の河北、安徽、河南の多くの人たちは、黒龍江周辺に移住した。

移民を止めることができなかったため、清朝は「柳条溝」を廃止した。こうした移民は黒龍江周辺にこれまでにない変化をもたらした。中原から来た漢族はやがて黒龍江の大地に住み着く農民となった。彼らは、身分は最低だったが、中原の文化を持ってきた。彼らによって、北方民族の支配者やこの地域に流されて来た宦官、文化人よりも、中原の文化は遥かに幅広く伝えられた。

中原の人たちが黒龍江周辺へ移動したことは、北方民族の中原への移動とは大きく違っていた。中原への移動は全民族の行動で、支配者による大規模な軍事行動だった。中原を抑えた北方民族にとって、文化の面では中原の文化に多くを譲らざるを得なかったにしても、戦いの勝利者だった北方民族は、これを屈辱とは意識しなかった。

以上の講演内容は漢族による一方的な視点だとも思われよう。中国は中華思想に固辞し、漢族は世界で最高の文明を持つと自負し、漢族以外を野蛮人と見なし、他の文化を軽蔑し、排斥していたという批判もある。

## 2 『モンゴル人の秘史』(ハイシツヒ著)

元は、モンゴル族によって中国全土で作り上げられた最初の巨大王朝であり、少数民族が統治者となった政権であった。元(モンゴル帝国)の領域は中央アジアまで広がり、ヨーロッパとの交流も盛んだった。中国の火薬、羅針盤、印刷術などは、元の時代にアラビア、ヨーロッパに伝わり、同時にアラビアの医学、天文学、農耕技術なども相次ぎ中国に伝来され、アラビア数字も元から使われ始めたのである。強力で、活発な元は、こうして様々な分野にめざましい発展をもたらした。

しかし、元は安住して発展することには馴染まなかった。遊牧文化の限

界、または自身の統治を有利にさせる身分制度が、元王朝の未来を閉す結果となった。むしろ、地位を極めて低く抑えられた漢族からの大きな抵抗も、元を終焉に追い込む主因の一つであった。

この後の成り行きについては、ドイツのモンゴル学者ワルター・ハイシッヒが、『モンゴルの歴史と文化』の中で触れた箇所があり、次のように論述している。

蜂起した漢人が、中国からモンゴル人を追い払った1368年以後、モンゴル文字で書かれたすべてのものを滅ぼしてしまったというわれわれの月並みな想像とは全く逆に、漢人はモンゴル語を保護し、さらに発展させた。1368年の後、数千のモンゴル兵は中国の王座についた新しい支配者明に、すすんで服した。ヨーロッパとの境界に至るまでの中国以外のアジア地域は、われわれが今日、国際会議や学会を英語を共通語として使用しているようにモンゴル語を用いるのに慣れていて、そこで次のようなことになった。

- 明朝が支配の座についた後、モンゴル語は意味を失うどころか、反対に重要になった。
- 1407年 明皇帝が北京に外国語学校を新設し、そこでは特にモンゴル語をすすめ奨励した。
- 1452年、中国はその西方宛ての外交文書をまた常にモンゴル語で書いた。モンゴル語は、中世においてラテン語がもっていたような、また今日英語がもっているのと同様な重要性をもち、いいかえれば諸民族を結びつける共用語であった。

当時、チンギス・ハーンとその子ウゲティの時代を扱った初期の歴史『モンゴル人の秘史』もまたモンゴル語から、漢字の助けをかりて記録され、明皇帝永楽の古典文献集大成〔永楽大典〕の中にとり入れられ

た。当時漢人はまた寛容であった。<sup>4)</sup>

ドイツのモンゴル学者は、中国の歴史及び文化意識を検証し、他民族に対する漢族の開放的、包容的な一面を違う角度から裏付けた。

異なる民族が同じ土地で対立しながらも、ともに生存し、繁栄するには、言語が不可欠な役割を担う。少数民族の政権が漢族を統治するには、言語の障害を越え、漢語を習得する必要がある、一方統治される漢族も相手の言語を受容すべきものである。長い雑居や少数民族と漢族の結婚などによって、自然なバイリンガル、自民族の言語と漢語、更に身近な他の少数民族の言語が話せるトリリンガルも少なくない。

一方、長い歴史を経て、少数民族には、自民族の言語が漢語に同化し、漢語を自民族の言語よりも多く使って、言語を失った民族もいる。1949年新中国が成立後、政府は民族及び言語の平等という政策を唱え、少数民族の言語・文字の使用と発展を重視し、法的保障を付し、言語研究者による少数民族の言語の調査や統計を推し進めた。言語があるだけで、文字がない民族については、その民族の文化を受け継ぎ、情報源を広げ、科学技術を高めるために、文字の作成も工夫された。主に19世紀の50年代に、政府は専門家と少数民族出身の知識人に呼びかけ、調査研究を重ね、相次ぎ壮、布依（ブイ）、彝（イ）、苗（ミャオ）など10の民族言語にアルファベット形式の文字法案を14種類作った。その中にミャオ族の異なる方言の4法案もある。

にもかかわらず、急速な近代化に伴って、一部少数民族の言語が消えつつあり、言語多様性の保護がそれなりの成果をあげていても、依然として厳しい状況が続いていることを見過ごしてはいけない。

日常生活の中でも、自民族の文化を持ちながら、漢文化に融合した少数民族によく出会う。筆者の住んでいた北京の団地にも、通っていた学校にも、

<sup>4)</sup> ハイシツヒ著 田中克彦訳「明朝が名誉挽回につくす」『モンゴルの歴史と文化』（岩波文庫）、2004、第2刷り、P27-28。

そのような隣人や同級生がいた。違う言葉も使いこなす彼らに、神秘を感じたものだ。学校の学芸会などでは、自民族の踊りや歌を披露したりしていた。私たちも彼らの民族舞踊、歌唱などを喜んで教わったりして、ステージで共演していた。このようなあり方を通して、理解を深め、相互の溶け込みを願っていた。

一方で、複雑な側面も垣間見えた。中国では、両親の民族が違えば、子供は一般に父方の民族を名乗る。少数民族の家庭とされれば、一人っ子政策の対象にはならないし、大学入試の際も合格点の優遇策があるため、都合のよい民族所属に切り換えることができる。だが両親とも少数民族なのに、子供は揃って漢族の名字を持っていたケースもある。それは多数派である漢族の子供に囲まれるわが子への親心とも考えられ、彼らにとっては、やはりいろいろな想いがあったのではないかと今は思う。

### 3 「和」に通じる妥協の知恵

他民族の王朝に統治される漢族は、なぜ消滅を免れたのか。自身を失わず、潰されぬように、相手と融合するための妥協、或いは譲歩を心得ていたからと私は思う。時間をかければ、いつかは同化されずに生き抜けるとして焦ることはしなかった。一方、新しい統治民族も漢族を徹底的に排除はしなかった。あるいは排除できなかった。元は宋を征服し、王朝を作ったが、宋の民を支配するのに、宋の役人を使い、大臣もモンゴル人ばかりではなく、色目人<sup>5)</sup>、漢人などもいた。いわばともに妥協の知恵を働かせ、融合の道を断ち切らなかった。

中国のこうした民族融合は決して元から始まったことではない。西アジア・地中海沿岸地方を結んだ歴史的なシルクロードが紀元前から出来上がり、唐（618-907年）ではより活発に広がった。当時北方からの遊牧民が唐

<sup>5)</sup> 元では西域各民族の人を指す。目の色が違うという意味とされている。



の首都長安（現在の西安）に流れ込み、中央アジアからも多くの人々がやって来た。よく知られている阿部仲麻呂は、遣唐使として来唐したが、その後日本に帰国せずに唐で玄宗皇帝などに仕えて従三品<sup>6)</sup>の高位にまで上った。2004年10月に唐の都・長安のあった西安で遣唐留学生井真成の墓誌が発見され、それによれば、「井真成は優秀であるため、唐の宮廷で五品の官位を得たという」<sup>7)</sup>。優秀な人材は民族どころか、国籍（当時、現代的な国籍という概念は存在しないが）にかかわらず起用されていた。

こうした人たちの智恵と文化が新天地に根を下ろし、また唐の文化は近隣の地域や国々にも影響を与え、漢字文化圏まで現れた。衝突や摩擦も隣り合わせていたに違いないが、シルクロードは中国にとって、世界を知り、彼我の経済交流を促す重要なルートであり、中国の対外関係を改善し、漢族と周辺民族との接近、融合を推し進めるのに大きく役立った。その結果、唐の文化は大きく開花し、中国の伝統的文化の礎となった。要するに、違う民族の政権になれば、元来の文化を守りながら、相手の異なる文化を吸収し、多彩で、豊かな様式へと変容していく。そこへ、更にしばらく紛争や戦争が起き、そして再び融合し大文化にたどりつく。融合の歴史から融合の文化が育まれていったのである。

文化に表われる融合の例は枚挙にいとまがない。「天時、地利、人和」という中では、最後の「人和」がより重要である。そして平穩、協調、調和を意味する「和」は、融合の真髓である。故宮の主要三大殿は「太和殿」、「中和殿」、「保和殿」という名がついている。どれも「和」が中心にある。明ではそれぞれ「皇極殿」、「中極殿」、「建極殿」だったはずだが、王朝を勝ち取った清が、満族と漢族の不和に気兼ねして、名前を取り換えたのかもしれない。今残っているのは清の時代に改めた名称という。「頤和園」や「庸和宮」の名称も、融合というこの伝統文化を表している。

<sup>6)</sup> 現在の国家図書館及び国家文書館館長に相当する。正三品、また従二品まで重用されていたとも言われている。

<sup>7)</sup> 王柯「中華と異民族」『多民族国家 中国』（岩波新書）、2005. 3、P 211～212。

異なるものが相容れず、不和と対立のままであると、やがて互いに衰え、消えてゆくであろう。しかし融合によって、衰えるどころか、より豊かで活力のあるものに生まれ変わる。敦煌で有名な莫高窟の壁画が漢文化にアジア、東アジアの文化を取り入れた集大成であるのも、まさしく異文化への寛容さによる融合文化の結晶と言えよう。

二胡の前身である胡弓は、唐の時代に北方民族が持ち込んだ楽器である。元の時代にイスラムの楽器から変身されたものである。1500年前にペルシャの商人が旅路で寂しさを紛らわせるのに弾いた楽器であるという諸説がある。その由緒はどうであれ、今は中国を代表する二胡に定着し、独奏や京劇などの伴奏楽器として、広く知られている。二胡の竿は紫檀、黒檀を、胴は蛇の皮を、弓毛は馬の毛を、中国土着の原料を生かした民族楽器と変わったのである。

「胡」の字から、北京の「胡同」が思い浮かぶ。語源はモンゴル語だという。モンゴル語の「井戸」は「Huto」と発音する。元を建国したモンゴル族が、草原から遠く離れた北京を「大都」とし、漢族と雑居した。自然の川や湖の代わりに、井戸が集落の生命源となっていた。そのため、井戸「Huto」を中心にこしらえた人々の住み着く集落は「胡同」と呼ばれ、今日まで至った。

食文化を眺めれば、胡瓜、胡桃、胡椒、胡萝卜（にんじん）、胡麻などの「移民」がある。「蕃」や「洋」と名づけた舶来の食物には、蕃茄（トマト）、蕃薯（サツマイモ）、洋葱（玉ねぎ）、洋姜（生姜）、洋芋（ジャガイモ）、洋白菜（キャベツ）などが挙げられる。これらの食材「移民」が、民衆の味覚を豊かにし、食卓を多彩にし、食生活をより楽しいものとした。

モンゴル族や満州族などが中国を統治したが、漢民族の文化も言語も滅ぼしはしなかった。むしろ巧く取り入れ、農耕技術などを学んで、漢語を使った。同時に漢民族は遊牧民族などから豊かな自然風俗の恩恵と薰陶を受け、豪快さ、寛容さなどを教わったのだ。

長い歴史の中で、時代の激変や戦災が絶えなかったとしても、結局56の

民族ともども中国を抱えて歳月を歩んで来た。各々の文化を誇りに思いながら、互いに学びあい、より豊かなものを醸成し、今日の中華文化を育ててきた。違う民族による新政権の誕生とともに、旧政権こそ滅びてしまうが、その後も文化は消えず、断ち切れもしなかった。多民族相互の理解、譲りあいこそ、融合の方向を失わず、融合という中国の歴史と文化そのものを貫いてきた。

林語堂が『中国与世界』という著書の中に論及しているように、

中国民族所以生存到現在，也一半是靠外族血脈的輸入，（略）中国歴史，約八百年必有王者興，其興不是因為王者，是因為新血之加入〔（中国の民族が今日まで生存できた理由の一つは、他民族の血脈を拒まなかったことによる。（略）中国の歴史では、この約八百年の間、新しい王朝が生まれたのは、王者の力によるものではなく、新しい血が入ってきたことによる〕<sup>8)</sup>。

陳舜臣はこうも述べている。「中国には歴代、様々な民族が侵入している。だから、中国人を何か純粋な民族や文化から定義するのは不可能だ。「庶民の心の中に伝わるものこそ中国といえる」<sup>9)</sup>。

このように、中国の歴史では、融合は常に大きな課題であり、主流でもあった。融合はまた中国文化の核心、活力であった。この融合は少数民族を漢民族に取り込む同化ではなく、少数民族と漢民族をあいまいにしてしまう融化でもない。融合は異なる民族の——異を尊重し、大事にしながら、共に学びあい、共存を求めつつある——有機的な「融和」、異を超越し、「異」より遥に元気で、豊かな融「和」なのだ。

「和」に到達するには、理解と寛容を欠いてはいけない。摩擦も対立も

<sup>8)</sup> 林語堂「中国的国民性」『中国与世界』下（国際文化出版公司），1997，P498。

<sup>9)</sup> 「中国史の肉声に迫る陳舜臣ワールド」、『読売新聞』夕刊，1999. 6. 8，7面，2版。

「和」の障害にはならず、障害とは自己意識に固執することだ。君は君で、我は我であるように拘り続けることは、摩擦と対立を深め、事態を複雑にさせ、道を塞ぎてしまうことに他ならない。互いに一步引き下がって妥協することで、道が開かれる。ともに相手のために妥協し、歩み寄る誠意と行動があつて、始めて摩擦と対立を最大限に避けられ、やがて「和」に辿り着く。

#### 4 学習して「和」を行く

『孫子兵法』はいま世界にもよく読まれているようだ。この兵法書は「知」を強調している。「知」があつて、はじめて「謀」があり、「行」がある。「知」がなければ、「謀」もなく、「行」もないはずだ。「知」は多くの面を含む。物事のすべてを明察し、見えないところを見抜き、成り行きを把握し、己も熟知する。兵法の論述ではあるが、一国の政策から庶民の日常までに大いに鑑みることがあろう。相手の実状にも自らの実情にも明るければ、「戦うべきと戦うべからざるを知る者は勝つ」のである。片方ではなく、「共にウィンウィン」、双方が「勝つ」。「知」とはいかにも大事である。「知」とは他でもなく、学ぶ、つまり謙虚を以て学習するということだと私は認識している。「和を以て尊しと為す」ならば、自らの世界においても他人の考えを知り、理解すべきではないか。一方的な考えに固執したり、過大に評価したりするのではなく、学ぶことを知ろう。知る目的は相手に打ち勝つのではなく、相手を理解するためだ。

03年12月温家宝前首相が訪米した際、ハーバード大学で講演し、次のように語った。

中华民族历来酷爱和平，2000年前，秦始皇修筑的长城是防御性的，1000年前，唐朝开辟通向西域的丝绸之路，是为了把丝绸，茶叶，瓷器销往世界，500年前著名的外交家和航海家郑和下西洋是为了同友邦结好，带去了精美的产品和先进的农业，手工业技术（中华民族は昔から平

和を愛している。2000年前、秦の始皇帝が修築した万里の長城は防衛的なもので、1000年前、唐の時代に開かれたシルクロードはシルク、お茶、磁器を世界に広げ、500年前、明の著名な外交官、航海家鄭和が大航海をした時、隣邦と親善を結ぶために美しい製品と進んだ農業、手工業技術を携えて行った)<sup>10)</sup>。

事実である。拡張も略奪もない「和」の大航海であった。

にもかかわらず、もしも世界に囲まれている中国、あるいは相手の国からこの大航海を顧みれば、そこには相手に対する中国の恩賜という思惑がないと言い切れるだろうか。中国では、近年歴史教科書の伝統的な見解に異を唱える認識が現れるようになってきている。今年「同舟共进（同舟共進）」という刊行物の第5期には、葛劍雄教授の論調が発表された。それは「历史教科书的“底线”（歴史教科書の“ボトムライン”）」というテーマに対する答えとなっている。

实际上、在郑和的时代，明朝统治者认为自己就是天下的中心，周边的蛮荒小国都必须服从我，我天朝大国有的是财富，我来是给你们赏赐的——当然这跟殖民主义有区别，但没有建立殖民地并不代表他尊重外国。如今却片面解释这段历史，好像郑和下西洋完全符合现代政治文明，而且我们研究郑和的学者居然也大多持这样的看法。这本质上不是教材的落后，而是我们学术研究的落后，观念的保守甚至已到了顽固的地步。这对学生造成的影响，是要持续到下一代甚至下面几代的（实际，鄭和の時代に、明の統治者の思うには、明が天下の中心であり、周辺の小さな未開国は明に従わなければならなかっただろう。豊かな富を持つ明は、相手の国々に富を分け与えたのであった——もちろんこれは植民地主義とは違うが、植民地を作らなかったのは何もその国への尊重だということ

<sup>10)</sup> <http://www.creaders.net> 万维读者网 2003. 12. 10.

とはならない。鄭和大航海の歴史は今、あたかも完全に近代の政治文明に相応しい行動だと一方的に解釈されている。それにわれわれ鄭和を研究する者の大多数はまさにこの認識を共有している。これは本質的には教材が遅れていることではなく、われわれの学術研究の遅れであり、保守的な観念にまで成り下がっていることだ。この認識が生徒に与える影響は、恐らく次の世代、強いては次の何世代までも続くであろう)<sup>11)</sup>。

このように、今までの見解の明らかな異議がここまで打ち上げられている。葛教授は中国第十一、十二回全国政協常務委員、復旦大学中国歴史地理研究所元所長、復旦大学図書館館長、また教育部社会科学委員会委員、「同舟共进」の編集委員など、多くの要職についている。氏の見解は中国史の再認識に、きっとより広く、より多くの示唆を与えるに違いない。

思えば、私たちはふだん、世の中を見る自分の目が正しいと思い込む。成長した環境や教育、体験などによって、物事を認識する自分なりの立場や視点が身に着く。身に着いた立場により物事を判断し、世界を認識するのは自然なことでもある。しかしそのため、他人の立場と違うときには、種々の摩擦や障害が発生する。結果、挫折やトラブルなども生じる。もしも互いに視点を換え、ともに相手の立場から同じことを見直せば、それまでの考え方も変わるかもしれない。あるいは自己修正につながるかもしれない。

つまり、世の中は、一人よがりの立場だけでは生き抜くことは不可能だ。自分を持ちながら、他人の考えや立場もつねに考慮すれば、自分自身も成長、成熟していくであろう。私たちの思うより、世の中は遥かに複雑である。だからこそ、「知」は大事だ。それはただ単に何かを知ることではなく、何かを理解し、了解し、そこから道が見つかるからだ。見方、生き方、価値観、世界観という道、知恵を得るからだ。個人の道、あるいは民族

<sup>11)</sup> 葛教授「历史教科书的“底线”（歴史教科書の“ボトムライン”）」<http://www.tongzhougongjin.com>。

の道、国の道、世界の道であろう。

実際、今私たちは様々な競争に直面している。入学の合否、企業の死活、国の発展などは、戦火の見えない競争に等しい。にもかかわらず、見る側面を変えれば、競争はチャレンジ、チャンスでもある。競争を利用しながら、ともに共存し、発展しようとチャレンジするには、大きな知恵が必要だ。と同時に競争があっても、戦争の種を決して撒かないことに努めるべきだ。近代化、科学化の進展に伴って、世界がますます行き来しやすくなりながら、窮屈にもなりつつある。それで自然と資源を大切に、様々なバランスを保ち、世界の平和を求め、民族と民族、国と国の相互理解と協調を実現してこそ、大きな幸せになる。

今こそ、「和」の来た道をきちんと振り返り、厳しく点検しなければならないのではないだろうか。自らの歴史、文化への理解と認識を深めるだけでなく、他の歴史、文化も学習し、理解し、これまでの「和」の心を活かして、これからも「和」を進めたい。